春色袖の雪

神保五弥 校〔為永春水人情本 一〕

古典文庫

春色袖の雪

神保五弥校〔為永春水人情本 一〕

古典文庫

古典文庫第二〇九冊

昭和三十九年十二月十日　印刷発行　©　（非売品）

校者　神保五弥

発行者　吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者　帝都印刷製本株式会社

春色袖の梅

発行所　東京都（王子局区内）北区西ケ原町三ノ三四　古典文庫

電（九一九）二七一七

振替口座東京一四五九七番

解　説

「春色袖之梅」中本全四編十二冊。奥附を有する初板本の存在を知らない。林美一氏本、国立国会図書館蔵本、を底本に使用した。初編天保八年、第二編天保九年、第三編天保十年、第四編天保十三年の出版である。第三編までは文栄堂前忠右衛門を板元とし、天保十・十一年の間に東壁堂永楽屋東四郎が求板し、第四編は、当初より東壁堂が板元である。刊年、板元の決定についての考証は、拙著「為永春水の研究」所収の論文、「人情読本論」を参照されたい。

この作品の春水人情本中に占める位置、また作品としての評価は、各自の御意見を待つが、私は、「春色梅児誉美」以下の主流的な作品群とは別に、春水が彼じしん高座で語つた講釈の内容を導入することで、読本と中本とを兼ねた新しい大衆小説、人情読本として執筆したものと考えている。この点についても前掲論文を参照していただければ幸甚である。さらにまた、この作品が、中村幸彦博士が述べておられる舌耕文芸家としての春水を考える上に、欠かせないものである

ことは明らかな事実でもある。その点からいつても注意してよい作品と考える。初板本を求めえないにも拘らず、活字化に踏みきつた理由である。御諒解をいただきたい。

活字化にあたっては、もとより原本に忠実ならんと心がけたが、紙面の都合上、口絵・挿絵は省略せざるをえなかった。が、口絵・挿絵は、春水人情本集(二)の「春色恋白波」の時に、併せて入れるはずである。また、挿絵の書きいれ、狂詠・発句の類も、作者が明記されているもの以外は註をもつて示さなかった。さらに、人情本の常としてほとんど総ふり仮名であるが、これは適宜省略したこともお断りしておく。句読点は、これも校訂者が適宜施したものである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

春色袖之梅

為永春水作

袖の梅序

毎度の袖の梅ぢやハいナア、とは揚巻に酔を醒さす廓の妙薬、そも〳〵この袖の梅は、ゆかしき薫りを垣根の外へ移して看察北娼倆談、思ひがけなき芽家の屋根に音もせで来て濡かゝる、梅の雫や春の雨、ゆかりの色の袖の香をうけて露けき恋衣、うつり香留る嬉しさに闇路も歩行案内にて、香やは蔵れず夜の梅、見て戻りしと分解もいらぬ気儘の独居に、いとゞなつかし兼言の其縁日に、早咲を思ふて求し室の楳、彼人と枕の元に詠めて明す花の兄が、恋の根分や継穂の小枝、やう〳〵恵し発端の実生からして、繁り枝に葉を重ねんと願ふのも、惚た心の恋の欲、花の苔を何時かはと、開くを待が楽しみなれど、悟られ

ぬゆゑにじれつたく、すねて見せたる木振(きぶり)さへながめにあかぬ連理の枝、似よりの恋の枝の枝まで、二編三編長けれど忽ち揃ふ此草子、実(み)を結ぶこと近きに在(あれ)ば、全本すべて十二巻つゞいて御高覽を願ふにな ん。

金竜山人狂訓亭為永春水㊞

北娼
倹談

春色袖之梅上之巻

江戸　狂訓亭主人作

第一回

そも大磯の廓より堤を東へ、道哲庵の後にあたつて一町あり。天水桶の町名に、佐介が谷金王寺門前町屋満川町としるしたり。彼里すゞめと称らるゝ通子もこゝは常に通らず。廓の者さへろく〳〵にしらぬ浮世の隠れ里、かゝる所にも住ばまた都一中の吉原八景、さえた調子の裏屋に聞えて、心にくゝもさし覗く路次より出る仕出しやの、料理の広蓋、皿、小鉢を明て下ゆく巳の到頃、たしかに昨夜の取ものと思ひやられて、何となく羨ましくもさつしてみれば、錦を捨て白屋に綴

れを愛する物好の人はともあれ、愛さるゝ花は桜か、菱、柏か、よしさなくともぺん〳〵草を明地に摘きる雛草、嶋田の中にも色気の在さうなる、長屋の奥の孤家をさして路次よりいそがしそうに入来る女は、十八九、藍上田の千筋、嶋縮緬の茶弁慶の下着、御納戸海気の裾まはし、黒繻子の帯をだらりと結び、まだ化粧もせぬ素貞のうつくしさ、呑過ぎてか、但し悔しき事ありてか、泣たやうなるはれ眼皮、かの孤家の障子を明けて入ながら、女「爺や今日はどうだへ。すこしは快気、トいひつゝあがる、娘の声聞て、やう〳〵起上る五十余才の爺親が、持病か、当座の風邪か、さも大儀さうに夜着をまくり、父「ヲヤ今朝はおそかつたの。たつた今粂さんが帰つて往なさつた。女「ヲヤ〳〵、もちつとはやく来ればよかつたネ。父「さうヨ。それに今日も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

また小遣いを置いてくんなすつたが、誠に気の毒だ。手めへどうぞよく礼をいつてくれろヨ。まだ手めへの許へとどけものが有た、ト薬の包を出してやり、父「ゆが涌てゐるから、すぐに飲で往ばいゝ。女「アイさうしませうよ、トいひながら、こぐすりのつゝみをひらき、つけ木をおりてすくひのむ。父「そりやア毎度服順還散とやらか。女「アイ、横山町の大又といふ薬種問屋で売血の道の妙薬サ。父「ムゝ、さうか。その順還散はよく治薬と見えて、血の道といふと衆人それを用ひるやうだノ。女「アゝ、血の薬には誠によく治ますハ、トいひながら涙をこぼす。父「ナゼ泣くのだ。女「ナアニ泣はしないが、あまり衆さんが深切だから、ツイ嬉し涙がこぼれたのサ。父「さればサ、おれも常住さう思つて居るが、あの子もいろ〳〵胴楽をしたあげく、継母さんがやかましいので当時家を出てゐるとの

はなし、何につけて不自由であらうのに、手めへが在とはいふものの、此頃ぢやアおれが病気でゐるから、大暑(てへげへ)糸さんのくれる小遣(こつけへ)でくらしてゐるのだ。手めへもマア、成たけアノ人に金をつかはせねへやうにするがいゝぜ、ト親子がふさぐはなしの折から、障子の外より女の声、まだ年ゆかずあどけなき調子。柳「お梅さん。梅「アイ、お柳さんかへ。よくよつておくれだネ、トいふ中(うち)お柳は障子をあけて、柳「さつきおまへが、毘沙門さまへお出のを見かけたから、大かたこゝへ倚(より)てお出だらうと思つて、ちよつと寄(より)ましたは。お爺さん、おあんばいはようございますか。父「アイ、ありがとう。柳「稽古をするとすぐに欠出(かけだ)して来ましたハ。梅「サア、トたばこを吸つけてやり、梅「おまへはよくけいこを精出すのう。今に仲の町で一番になるヨ。第

一常盤屋の宅は旦那が壮気ものだからいい。俄でもなんでも、他一倍金をかけるし、おまへたちまでも気をつけられるから、いくら仕合せだかしれねへ。柳「アヽ、それはほんとうにさうだヨ。マア仲の町でも常盤屋といふと他の請がよいから、私なんぞもおのづから肩身が広いやうな心もちでありますヨ。梅「さうさ。そりやアおほきに世間のとりもちひが違ふのサ。全躰また、お茶屋の旦那があんまりけち〳〵するのは、見ともねへハネ。父「大昔は揚屋といふものが今の茶やだから、マア女郎屋に負るわけはねへのサ。梅「ちやんや、用がなかア、私きやアモウ行からネ。（挿絵。「お梅爺親の病を尋ねて、粂次郎の安否をとふ」との書きいれあり）ひよつと粂さんがまた来たら、あした妙見さまへ参る時にこゝへ寄から、是非待て居ておくれと、さういつてま

たして置ておくれな。父「ヲイ〳〵承知だ。アゝそれはいゝが、お柳さんあんまりおさう〳〵だのう。柳「ナニどういたして、おやかましうございました。ハイさようなら、ト着物のまへを合せて褄を引あげ、柳「サアお出な、ト下駄をならべて先へ出る。梅「アレサなんだネ、お柳さん、私のはきものまで直してからに、勿体ない、トちよいといただく真似をしてはきながら、梅「それじやア、爺(ちやん)や、きつとさう言ておくれヨ。父「ヲゝサ、さういふはな。梅「それでもおまへなんざア、いつでもツイわすれたといふのが癖だものを。柳「ヲホゝゝ。誠に御念が入ねへ。梅「ヲホゝゝゝ。サアまゐらう。アゝもう宅(うち)へ帰(けへ)るのが否(いや)だヨ。梅「わちきア、宅はよいが気のつまる御座しきが誠にいやだハ。さういふうちにも、梅「ヲット、其後をおいひでない。

御存の女房のつとめるざしきだろう。柳「ヲホヽヽヽ。梅「どうもマア、女一通りの事は言分なしで、何も角もよく行とゞくには違ひないけれど、こつちの芸が未熟だと何だかさげしまれるやうで、勤めにくいのサ。

作者曰、女子と小人はやしない難しとは古人の金言なれども、又閨房の秀とて、女子にも男にまさる智ある者、賞て物の本に記してあれど、今の世に衆人の賞る婦人は信に賞べきものにはあらず。小人の如在なしなどゝ賞る女を傍より見聞すれば、たゞよく男になれやすく、且幸ひにして、金満の世間にうとき旦那にとり入、女に似あはず万事出過てその座を取持、押づよのすれつからしの仕方、なづけて愚人は配制といふ。諸芸の口元ばかりを早

合点して、極意までは知らねど声うるはしく、ちよいと一口うまき所ばかりを聞せてやんやといはれ、何事もまるで一段他におしへるの業はなく、おとなしき新子の唄女、また如在なき女郎唄女も花金をとりつぐ役に勤めて、母御さんとか姉さんとか、とりはやすときはつけあがり、歳のゆかざる唄女などを下目に見て、ろく〳〵にもののあいさつもせず。嗚呼拙いかな一個の勇士、箱挑灯を中間に持せて供をさせる身分も、目前が見えねば右にしるす類の女を酒色の雇ひに頼み、こけにされて金をつかふ。実に太平の御代こそありがたけれ。たとへ婦人は智ありとも、万ひかへめにしておとなしきを要とつゝしみたまへかし。

これはさておき、お梅、お柳は堤にあがりて帰りゆく。向ふの方よ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com